トルコ出張報告書

大島　史（東京外国語大学大学院博士後期課程）

行き先：トルコ共和国イスタンブル
受け入れ先：ベヤズト国立図書館
目的：オスマン語定期刊行物資料のデジタル化作業
期間：2005 年 9 月 6 日ー9 月 30 日

筆者は昨年に引き続き 2005 年 9 月 6 日から 9 月 30 日まで、トルコ共和国イスタンブルのベヤズト国立図書館を訪れた。今回の目的は、2003 年度に始まった旧ハック・タールク・ウス図書館所蔵オスマン語定期刊行物史料デジタル化事業の進行状況の確認と、必要な機材の追加購入である。詳細については昨年度の出張報告を参照されたいが、前回の訪問時にパソコン、デジタルカメラ、撮影用作業台等の機材をすべて揃え、すでに撮影開始から 1 年近くが経とうとしていた。

今回は直接ベヤズト国立図書館の作業部屋へ向かった。図書の整理と目録作りは去年までにおおよそ終了しており、アブドゥッラフマン氏をリーダーとした去年と同じメンバーによって撮影は順調に進んでいた。撮影した枚数は 7 万枚を超えたそうだが、それでも書庫には撮影を待つ資料が山積みになっている。今回懸念していたことは、データの保存場所が不足してきているのではないかということであったが、現地へ行ってみてその心配は現実のものであったことが判明した。昨年度 20 万円の予算で、80GB のハードディスクを搭載したパソコンを 2 台購入したが、かなり順調に作業が進んでいたため、パソコンの記憶域はほぼ限界に達していた。この数ヶ月は彼らの私物のマシンにまでデータを一時的に待避せざるを得ない状況であったという。パソコンのハードディスクはある程度の空き容量を残しておかないとシステム全体の不安定につながるし、もしパソコンが故障すれば 1 年間の作業が無になってしまうことになる。そこで昨年度パソコンを買ったのと同じ店に出向き、300GB のハードディスクを 4 台と DVD への書き込み機器 1 台を購入した。これで約 1 テラバイトのデータ保管場所が確保できたことになる。

後日このプロジェクトのトルコ側責任者であり、イスタンブル文化大学教授でもあるイスケンデル・パラ氏のところに伺った。パラ氏は大学で教鞭を取る傍ら、執筆、テレビの文化番組作成と様々な職務をこなす多忙な方であるが、このデジタル化作業に多大な関心を寄せ、作業の進み具合を細かくチェックして下さっている。パラ氏からは「昨年度以来の購入機材の扱いに関する協定文書」へのサインと、その他の必要書類を受け取った。

作業場風景

また今回撮影される予定の資料をすべて整理した目録が出来

上がっていた。これは昨年度作成した目録のデータベースを、助手の方々がマイクロソフト・ワード形式にまとめてくれたものである。目録には編集者、出版社、ページ数などの基本情報をはじめ、欠番、刊行物の名称変更、通し番号の不一致等、細かい情報まできちんと記録されている。たでさえ大変な撮影作業の傍ら、これだけ丁寧な目録を作成してくれたことに感謝するばかりである。しかも目録のデータ形式は将来オンライン検索が可能になった場合、図書検索用データベースに簡単に移行できる形式となっている。これはひとえに彼らがオスマン語等の専門分野と同時に司書の資格も持ち、図書館学に精通しているおかげである。この目録はトルコで出版の話が持ち上がっているそうで、数々の資料のリストを見てデータの公開を心待ちにする研究者は、トルコ国内外を問わず大勢いることであろう。

また同図書館では本学のCOE事業の他にも独自に図書のデジタル化作業を進めており、その作業場も見せていただいた。撮影対象の資料はほとんどすべて紙が劣化して黄ばんでいる。カメラの調整をすることで随分白くはなるが、それでも文字の読みにくさは残る。その作業場では撮影時に映り込む、人間の手や余白の部分を切り取り、さらに黄色く変質した紙を白色化、文字の部分の黒を濃くする作業を行っていた。現在史資料ハブ COE の作業を請け負っている人数では、その修正作業にまで手は回らないが、今後資料を公開する上で非常に参考になる技術と手法を彼らが持っていることは大変心強い。

ハードディスクが納品されいよいよ帰国が翌日に迫った日、昨年日本で購入していった作業用デジタルカメラ（キャノン製）が故障してしまった。撮影した写真の下半分が真っ黒になってしまう。イスタンブルのキャノンのサービス店に持ち込むが、国際保証書が通用するのはキャノンが協定を結んだ8カ国のみで、トルコには修理センターこそあるものの保証書は使えなかった。仕方なく有償での修理となる。故障の原因はカメラを酷使したため、レンズ内の反射板を支える部品が摩耗して折れてしまったことであると判明した。前述の通り1年間の撮影枚数は7万点を超え、失敗分やレンズの調整回数を考えると通常の使用回数を遥かに超えていたようである。結局修理の仕上がりは筆者の帰国日には間に合わず、見積もりだけ取ってもらい後に領収書を郵送してもらうことになった。筆者の滞在中に故障したのは不幸中の幸いであったが、1年間酷使した機材の調子がおかしくなることは今後も十分にあり得よう。カメラのバッテリーも2台用意したものの、1年で随分消耗し電池の持ちが悪くなっているという。バッテリーについては不安を残したままの帰国となったが、今後も機器の故障で作業が中断されることが懸念される。これからは機械の維持や消耗品の補充、そして最終的に日本にどのような形でデータを持ち帰るかを検討していく必要があるだろう。

しかし作業の順調な進み具合と成果を見て、この事業の持つ意義を改めて実感した。昨年に引き続き筆者にとっても大変充実したイスタンブル滞在となったことを嬉しく思う。プロジェクトの意義を理解し、確かな技術力を持つ方々に恵まれたことは大変好運であり、今後も無事に作業が進むことを願うばかりである

撮影作業の様子